

(..)φ20230702

日付をまたいだころ、私がリビングで歯ブラシをシャコシャコしていたら、父親がスマホを片手に話しかけてきた。

(父親、何気ない雑談の体で)

「今、サイコパスに関する記事を読んたよ」

(私、何やら不穏な空気を感じつつ)

「ふーん」

(父親、続ける)

「ブログのフォロワーの継母がいわゆる「サイコパス」だったらしいんだよ。

サイコパスの項目にほとんど当てはまるんだってな。人のことを思いやれないとか、尊大だとか」

(私、ある存在を属性で貶価するような物言いについて、神経をとがらせる)

「ふーん」

(父親、続ける)

「それでそのフォロワーさんは随分苦労したんだって。いるもんだね、そういう人って」

(私、うんざりしながら歯ブラシをシャコシャコする)

「ふーん」

(父親、続ける)

「仏教でも言われているらしいな。そういう人は救いようがないってブッダも言ってたらしいよ」

(私、歯ブラシをシャコシャコしながら)

「じゃあ、ブッダは差別主義者だね。あと、ある性質を持った人を病理化して排除するのやめた方がいいよ」

(父親、なんかモゴモゴ言いながらソファに座る)

「そうか……(モゴモゴ)」

(私、歯を磨き終わる)

父親の差別的なものいいにうんざりした直後、私がポーっとしていたら、また父親が話かけてきた。

(父親、ソファに座ってスマホ片手に)

「おい、しまむら、何かご飯食べるか？」

(私、別にお腹減っていない)

「いや、食べない」

ていうか、歯を磨いたばかりだし、夜だからもう寝るし……。

ところで、父親は普段から私のことをすごく気にかけていて、
お腹が減っていないかとか、疲れていないかとかを細かく見ている。

ばいざうえい、父親は先の発言のようによく差別的な雑談を話してくる。

さらに、ばいざうえい、私はよく差別的な発言をしまして落ち込んでいる。

それらの瞬間、私たちは差別する者同士となっている。

指摘したり、指摘されたり、自覚したり。私たちはその瞬間に緊張関係に引き込まれる。

ところで、私たちは同じ屋根の下で飯を食っている。

だから何だという話だが、とにかく飯を食っている。

差別発言の直後に、いつものように飯を食うかどうか

尋ねられたことに何だか拍子抜けしてしまって、

日常と緊張が奇妙に入り混じったまま、私は

「いや、食べない」

と気持ち悪い気味に答えた。

ご飯は明日、起きてから食べるよ。

だから何だって話だけど、私は多分明日、起き抜けに気の抜けた感じで飯を食うだろう。

(終)